



新キャンパス移転記念 金沢美術工芸大学所蔵名品展－KANABIが生み出したアーティスト展－会場内風景（2号館アートギャラリー）

巻頭言

昭和21年に創設され令和5年で77周年を迎えた金沢美術工芸大学は、令和5年10月より新キャンパスでの大学運営を開始した。新キャンパスの位置する小立野校地の向かいには令和4年7月に移転した石川県立図書館を有し、知と創造の拠点とした金沢の新たな文教地区になったといえよう。今後も本学は学術的な研究と芸術表現を通じて、社会、地域に貢献し、「手で考え、心でつくる」をモットーに創造力を高め、人間味あふれる個性と倫理を涵養し、未来社会を築く拓く創造者の育成を目指して行く。美術工芸研究所では収蔵品、卒業修了制作の買い上げ作品等の調査を複数年にかけて実施し、現状の把握と移転先での有効活用を協議し進めて来た。調査の結果、所蔵品件数は芸術資料が約6,900点、買い上げ作品約1,200点（共に令和4年度末時点）となる。令和4年度までは研究所所轄の収蔵庫、学外倉庫、各専攻等での保管管理で対応を行ってきたが、移転後は美術工芸研究所が一括して収蔵品管理を行い円滑な芸術資料の活用を推進している。旧校地に置かれていた石彫等の屋外作品に関しては、担当教職員による協力のもと、新校地周縁に修景と安全性に配慮しながら適材適所に配置し、美術大学に相応しい景観を形成している。旧校舎では平成29年4月に美術工芸研究所ギャラリーが開設され、本学の所蔵する卒業、修了制作や美術工芸資料として収集された収蔵品等の展示を行って来た。また同会場に「平成の百工比照」の展示スペースも併設していた。新校舎では新たにアートギャラリーを開設し、所蔵する本学ゆかりの作家たちの作品や世界的に著名な芸術家の傑作を含め、美術、彫刻、工芸、デザイン、関連する研究資料等を展示し、広く公開する場として機能させている。令和5年10月より令和6年3月まで新キャンパス移転事業の一環

として「金沢美術工芸大学所蔵名品展」を企画開催しており、12月末時点で約3,300人の来館数があった。このことから内外問わず多くの方から注目されている事が伺われる。同時に「平成の百工比照」を常設展示するスペースを美術館・図書館棟内に新設した。円形状に配置された収集品は、壁面に取り付けられた大画面のタッチパネルを操作する事で、各分野、地域から検索する事が可能であり、調査したい内容に関して滞りなく調査する事が可能である。収集資料の配置とシステムの連携により操作性が向上し、そのことも含め本学独自の事業として各方面から高い評価を得ている。平成21年度より諸資料の収集に着手した取り組みは、これまでに陶磁、漆工、金工、染織の4分野を中心に約6,200点（令和4年度末時点）の資料収集と4K映像制作である。さらに令和3年度より国立民族学博物館との連携協定に基づき、平成の百工比照コレクションデータベースを基に高等教育教材（映像）の制作を開始した。本映像は、平成の百工比照コレクションの成り立ちや活用方法までを説明するもので、全国の博物館学芸員課程で活用できる貴重な資料として今後の活用が期待される。この事業は金沢市との連携のもと現在も進行中であり、今後も資料の充実と資料の有効利用に向けた整備を継続して行く。美術工芸研究所の本来の使命は、美術やデザイン、工芸に関する研究、教育、展示、保存などを通じて、芸術的な創造性や文化的な遺産の保護、発展を促進することである。現在も年次計画に沿った展示や業務あるいはこれまでの資料の整理など、現在も仕事は多忙ではあるが、研究所自らの事業を学芸員や関係する教員・部署とともに考え、大学として社会や市民へ貢献できる事業として取り組みたいと考える。

新キャンパス移転記念所蔵名品展



Exhibition

新キャンパス移転記念
金沢美術工芸大学所蔵名品展

鴨居玲「Clown」1978年、トリグラフ 金沢美術工芸大学蔵 H.C. Roy Carney

前期 2023年10月2日(月)～12月1日(金)
主催：2023ビエンナーレいしかわ秋の芸術祭実行委員会、石川県、一般財団法人石川県芸術文化協会、金沢美術工芸大学 美術工芸研究所
会場：金沢美術工芸大学 アートギャラリー
開場時間 10:00～17:00 (土日祝日は閉場)

後期 12月18日(月)～2024年3月1日(金)
－KANABIが生み出したアーティスト展－
主催：金沢美術工芸大学 美術工芸研究所
会場：金沢美術工芸大学 美術工芸研究所 2023芸術祭
後援：金沢市、北國新聞社
お問い合わせ先：金沢美術工芸大学 美術工芸研究所 076-262-3519

金沢美術工芸大学
KANAZAWA COLLEGE OF ART

展覧会名：「新キャンパス移転記念 金沢美術工芸大学所蔵名品展」

【前期】

会期：2023年10月2日(月)～12月1日(金)

時間：午前10時～午後5時

観覧料：無料

場所：金沢美術工芸大学 アートギャラリー

主催：2023ビエンナーレいしかわ秋の芸術祭実行委員会、石川県、一般財団法人石川県芸術文化協会、金沢美術工芸大学 美術工芸研究所

後援：金沢市、北國新聞社

入場者数：3,227名

【後期】－KANABIが生み出したアーティスト展－

会期：2023年12月18日(月)～2024年3月1日(金)

時間：午前10時～午後5時

観覧料：無料

場所：金沢美術工芸大学 アートギャラリー

主催：金沢美術工芸大学 美術工芸研究所

後援：金沢市、北國新聞社

入場者数：542名

金沢美術工芸大学は2023年10月1日より、更なる飛躍を期して新キャンパスでの歩みをはじめた。地域に開かれた

大学をめざす新キャンパスでは、図書館・美術館棟内に「アートギャラリー」と「平成の百工比照」展示・閲覧コーナーとがそれぞれ独立するかたちで拡充整備されている。アートギャラリーのこけら落としとなる本展では、教育研究用の資料として本学がこれまで収集してきた約6,900点にのぼる所蔵品の中から、本学ゆかりの作家の作品をはじめとした粒ぞろいの優品を展示した。



会場内展示風景（前期）

出展作品一覧【前期】

鴨居玲「Clown」1978年／鴨居玲「Bar」1968年／鴨居玲「廃兵」1973年／宮本三郎「赤い服」1962年／高光一也「ビザンチン回想」1977年／小糸源太郎「一目千本」1961年／マリノ・マリーニ「自刻像」1942年／アントワヌ・ブールデル「アポロンの首」1900年／マイセン「ポ・プリ」1860～80年頃／アブラハム・ボス「五感」1638年頃／西山英雄「富士西湖」1970年／原田太乙「黒姫（暮色）」1975年／木村雨山「月光 衝立」1957年／佐々木泉景「松に鶴図」江戸後期／佐々木泉景「竹に鶴図」江戸後期／古九谷「色絵岩に鳥図平鉢」江戸前期（17世紀）／古九谷「青手葉蘭図平鉢」江戸前期（17世紀）／伝 清水九兵衛「蓬莱山時絵鏡箱」江戸前期／五十嵐派「秋野時絵硯箱」江戸前期／水野源六家「刀装具原図」江戸時代／水野源六家「刀装具一式」江戸時代／初代辻村兼若「刀 銘越中守藤原高平 元和八年正月日」1622年／四ツ井芦雪「大名行列図巻物」1912年／富本憲吉「色絵四弁花文飾壺」1937年

後期は「－KANABIが生み出したアーティスト展－」と銘

打って、本学出身の作家が在学中あるいは青年期から壮年期にかけて制作したみずみずしい感性の光る作品に焦点をしぼり、美術・工芸・デザインなどさまざまな分野で活躍する卒業生の作品を紹介した。

買上制度を通じて本学が所蔵している卒業・修了制作や、作家にとってその後の活躍の原点ともいえる時期の意欲作をとりあげることにより、旧キャンパスにおける教育成果の一端を振り返るとともに、新キャンパスでの制作・研究に励む在学生へのエールともなげばと願い、展示を構成した。



中川衛「象嵌籠銀花器」1990年 金沢美術工芸大学蔵

金工家・中川衛(1947～)は1971年に金沢美術工芸大学産業美術学科を卒業後、松下電工(現・パナソニック株式会社)に入社し電気製品のデザインに携わる。1974年、27歳のとき帰郷し、石川県工業試験場に勤務していた頃に石川県立美術館で見た燈の斬新なデザインに魅了され、最後の加賀象嵌師といわれていた彫金家の高橋介州(1905-2004)に師事し加賀象嵌の技法を習得した。高橋に入門して5年後の1979年には日本伝統工芸展に初入選を遂げ、その後も着実に実績を重ね、1988年には「縞文象嵌籠銀花器」(文化庁所蔵)で第35回日本伝統工芸展朝日新聞社賞を受賞するなど名実ともに現代の加賀象嵌を背負って立つ存在となっていく。

本学には1985年に美術工芸研究所の専任研究員として着任以降、金工技術の調査研究はもとより、学生の教育に尽力した。1996年には教授に就任し、同年の第43回日本伝統工芸展で「象嵌籠銀花器『八雲立つ』」が日本工芸会奨励賞を受賞する。卯辰山工芸工房や造幣局でも講義を行い、海外でも積極的に研修を行うなど国内外で後進の育成と技術の継承につとめ、2004年には重要無形文化財保持者「彫金」に認定された。

本展で展示した「象嵌籠銀花器」は1990年、43歳の頃に制作した作品で、金、銀、四分一による直線的な幾何学構成の象嵌がどっしりとした鋳造の花器に施され、「縞文象嵌籠銀花器」に連なる初期の作例である。このあと中川の作風は、海外の調査先で心を動かされた風景を題材とするなど詩情性を強め、実景に基づく有機的なデザインを精緻な重ね象嵌で表現し新境地を開拓するが、こうした展開の礎となった時期の貴重な作品といえる。

中川が卒業した「産業美術学科」とは1955年に本学が短期大学から四年制へ移行した際に設立された学科で、戦後の経済復興にデザインの面から貢献する人材を多く輩出した。時代の流れに応じて1965年に商業デザイン、工業デザイン、工芸・繊維デザインの3専攻制に改組される中、工業デザインを修めた中川は松下電工で電気シェーバーやドライヤーといった家電製品のデザインに数年間従事したが、量産を前提とした素材の探求や市場調査といった経験がその後の制作の糧となっているという。デザイナーとしての経験を活かして自分なりの美意識を追求しようという強い思いをもつ一方、立体作品の試作の際にはインダストリアルクレイや発泡ウレタンといった多様な素材を駆使し、手を動かしながら発想の幅を広げるという手法はまさに「手で考え、心でつくる」という本学のカレッジモットーをも体現している。



会場内展示風景(後期)

今日ますます流動化する現代社会において、本学を卒業・修了したのちに、当初の進路を変更する学生も少なくないことだろう。あるいは制作や研究の進展に応じて表現に変化が生じることは作家にとって自然である。本展で紹介したのは、振り返ってみれば必ずしも作家の最高到達点を示す作例ではないかもしれないが、のちの展開を予感させる意欲に満ち、その時々には持てる若い力を尽くした痕跡におのずと惹き込まれるような力作である。

出展作品一覧【後期】

鴨居玲「酔い候らえ」1975年頃／鴨居玲「廃兵」1975年頃／釣谷幸輝「シヨンの島」1999年／釣谷幸輝「記憶は煙となって飛んで行く」1999年／釣谷幸輝「王様の機嫌が悪くなければ」1999年／釣谷幸輝「堆積する時間」2000年／中川衛「象嵌籠銀花器」1990年／山村慎哉「作品Ⅱ」1993年／山村慎哉「作品Ⅲ」1993年／山村慎哉「作品Ⅳ」1993年／山村慎哉「作品Ⅴ」1993年／青木千絵「BODY 06-1」2010年／開光市「広場にて」1984年／松崎十朗「起重機」1985年／出和絵里「森」2011年／井上涼「赤ずきん与健康」2007年

(在田 有里子／美術工芸研究所 学芸員)

教員研究発表展2023 美大のしごと

今年度の「金沢美術工芸大学 教員研究発表展2023 ー美大のしごとー」は、2023年11月21日から12月3日までの13日間にわたって金沢21世紀美術館市民ギャラリーAにおいて開催された。展覧会に関する企画と準備は美術工芸研究所および附置機関である教育研究センターが主として担当している。

芸術系大学である本学の教員の研究とは、美術・工芸・デザインなどについて、これまでの知見を集めそこから未来に向けた新しい視座を構築する活動である。その中で教員研究発表展は、本学の教員の日々の研究成果をベースとしてさまざまな作品が生み出され、これからを切り拓く表現を市民に公開する目的で行われている。表現者として、そして研究者として優れた本学の教員による日々の研究成果がこの展示に一同に会する。芸術表現研究の最先端を幅広い領域で見ることができるこの機会は、地域のみならず日本の芸術文化をリードするものである。

今回展示された作品は計25点、参加教員数は25名であった。内容としては美術科教員による絵画・彫刻作品やメディア表現作品と研究活動の展示。デザイン科教員による作品および研究活動の展示、工芸科教員による工芸作品展示が行われた。例年に比べ出展数は残念ながら少なく、その理由として教員が研究に集中する期間が折悪しく本学の移転作業と重なったことが挙げられる。しかしそのような中にもかかわらず、日頃の研究成果公開を実現していただいた先生方には心から感謝申し上げるところである。

開幕初日には昨年同様出展した教員によるギャラリートークが行われ、各教員による作品解説が行われた。また、展示会場入口では今年度移転する大学のプロモーション動画も放映され、大学の今を市民に伝えるよう努めた。

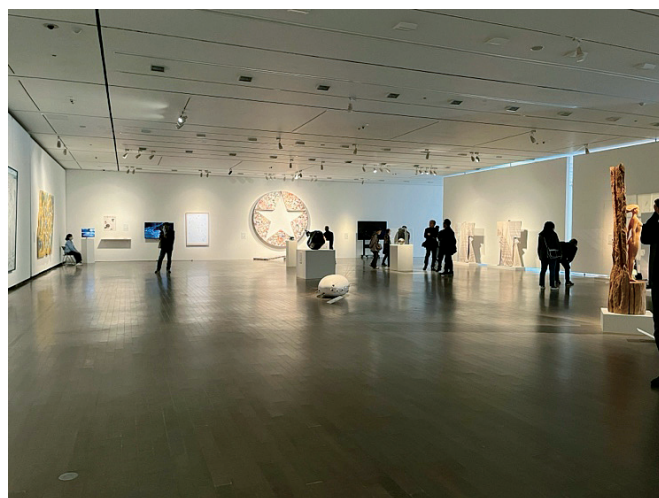
今年度は、展示計画と会場構成についてはこれまでにない新たな試みを行った。センターの西本先生によって打ち出された今回の展示は、会場の壁を可能な限り取り払い、多くの作品が一つの空間の中で展示されるようにと計画されたものである。絵画などの平面作品、彫刻や工芸の立体作品などが広い空間の中で一望でき、専攻や領域を越えた開放的な展示となった。今年度もそれぞれの展示には作品のタイトルや解説を行う表示が行われ、また同時に出展した各教員の紹介も表示した。

展覧会の開催を周知するため、今年もポスター・フライヤーを作成し配布した。作成についてはこのところ学生に依頼を行っている。今年もセンターの樺島先生に監修の任をとっていただき、デザイン科視覚デザイン専攻4年の伊藤優汰さんが制作を行った。本学の校章と金剛石のカッティングなどをモチーフにデザインされ、本学のこれまでの輝かしい歴史と新キャンパスへの移転に向けた新たな輝きをイメージしたものとなった。最近のデザインの中でも一風変わった趣となった今回のデザインは、展示会場入り口でもひととき目を引くものとして展覧会に彩りを添えるものになった。

今年は会期が13日間と長いものの、また新たな感染拡大のフェーズにさしかかったこともあり来場者の出足が懸念

されたが、最終の来場者数は14,431名にのぼり、近年の中では最も多くの来場者を迎えることができた。会場である21世紀美術館は金沢を訪れる観光客が繁く足を運ぶ場でもあり、本展示が金沢市民に対するものととどまらず、国内および世界の人々の目に多く触れることができたものと思われる。本学の成果をこのような形で多くの方に示すことができたのは全くもって幸甚なことである。

この成功は展覧会担当として尽力いただいた先生方にもまして、展示計画や広報、そして多数に及び連絡調整や管理において文字通り八面六臂の仕事を果たして頂いた、研究所の在田学芸員を中心としたスタッフの活躍に負うところである。
(教育研究センター長／荷方 邦夫)



会場風景



青木先生によるギャラリートーク

芸術資料の移転について

本学の所蔵品は、本学ゆかりの作家の作品や世界的に著名な芸術家の作品を含め、絵画、彫刻、工芸、デザイン、関連資料などが約6,900点、また学生買上作品が約1,200点（令和4年度末時点）にのぼる。所蔵品管理システムにて管理している上記の芸術資料のほかに、過去に美術工芸研究所が研究事業として実施した「世界の金箔総合調査」の際の収集品や、平成21年度から金沢市と共同で着手した「平成の百工比照」コレクションなど、教育資料として管理しているものもある。

所蔵品は、旧キャンパス内2階の収蔵庫および学外の収蔵庫に分散して保管されるとともに、一部の彫刻作品はキャンパス敷地内で屋内外に常設展示されていた。また教育資料は旧美術工芸研究所事務室近隣の教室で保管されていた。学外の収蔵庫に関しては、過去に貸借を開始した時期や経緯がそれぞれ異なるようで、施設の容積や温湿度等の実状に応じてその都度、保管する資料が配分されてきたように見受けられた。

こうした状況をふまえ、移転に際しては収蔵庫間での混乱を避けるため、旧キャンパス内収蔵庫と教室に保管されていた芸術資料と教育資料については学外収蔵庫への振り分けは行わず、すべて新キャンパス内地下収蔵庫へ移転することを目指した。また旧キャンパスにおいてエントランスホールや美大ホールなど屋内にて常設展示されていた彫刻作品は新キャンパスにおいても1号館および2号館の屋内で常設展示することとし、屋外にて常設展示されていた彫刻作品は台座から切り離すなどの処置をおこなったうえで新キャンパス収蔵庫へ移送することとなった。



作品の移転作業

いっぽうで、移転にともない専攻から美術工芸研究所へ移管された学生買上作品約1,200点については、原則として絵画・芸術学・旧ファッションデザインを新キャンパスへ、彫刻・工芸・デザインを学外収蔵庫へと振り分けて移送することとした。この詳細については、学生買上作品の移送を主に担当した頓宮学芸員の稿を参照されたい。

学外収蔵庫の許容量の問題と、新キャンパスにおける修景という双方の観点から、学生買上作品のうち屋外での常設展示にたえる石彫作品については新キャンパスの外構部に設置することとなり、原研究所長、芝山教授（彫刻専攻）、渋谷教授（一般教育等・博物館学）と研究所学芸員によるワーキンググループを組織してこのプロジェクトを推進した。彫刻専攻教員からの情報収集を行うとともに作品の吊上げ調査を事前に実施し、必要に応じて心棒の追加などの加工を行った上で、令和4年度末から令和5年の夏にかけて移設作業を行い、27点の石彫作品が新キャンパス外構部に設置された。

当初、新キャンパス収蔵庫への作品移転は令和5年の夏を予定していたが、建設工事の進捗状況により大型車両の入構可能時期に変更があり、急遽4月に2号館アートギャラリーへ作品を仮置きしたうえで、絵画ラックの施工完了後の6月に地下収蔵庫へ運び入れるという二段階を踏むこととなった。想定外ではあったものの、このスケジュールを活かすべく、空になった旧キャンパス収蔵庫へ学内に点在していた学生買上作品を事前集荷するなどの工夫をして移転計画全体の帳尻をあわせた。

施設の供用開始前には燻蒸作業を実施する必要があったが、人体に有害な薬剤を使用するために施設全体を立入禁止にする期間が生じる。特に図書館の書籍の移転作業との兼ね合いもあり司書と随時連携して日程調整の上、7月に作品および収蔵庫の全体燻蒸を実施した。その後は新収蔵庫の温湿度管理や作品の整理残務を行いながら、10月に開幕する展覧会のためアートギャラリーで展示搬入を行った。所蔵品の移転に際しては、入札の仕様書策定から移転作業の実務まで学芸員の裁量に任されていたため、本学教職員のみならず建設事務所との連携や専門業者との調整に相当の時間を割いたが、多くの方の協力をいただき、重大な事故もなく所蔵品を移転することができ安堵している。



作品の梱包作業

（在田 有里子／美術工芸研究所 学芸員）

学生買上作品の移転について

本学では開学以来、優秀な作品や論文を選考して購入する買上制度を通じて、開学間もない昭和24年以来、約1,200点の作品を収集している。キャンパス移転に伴う学生買上作品の集約作業は、令和5年4月から6月の期間で専攻ごとに実施した。また作品集約にあたって、各専攻の教員、助手、技術専門員と学生にご協力いただいた。集約した作品は同年4月から12月の期間で複数回にわたって新たな収蔵場所へと移送されている。学外収蔵庫の活用にあたっては、まず整理作業を実施し、保管していた展示台は教員を対象に頒布を行った。その後、作品の移送とあわせて新たに作品棚を増設し、収蔵機能の拡充を目指して現在も継続して整備を行っている。



油画専攻買上作品の集約風景（一部）



アートギャラリーでの作品集約風景（一部）

旧キャンパスでは保管スペースの問題があり、作品は専攻ごとに管理していたが、移転を機に全学的な保管・活用へと移行した。作品を各専攻に預けていたこともあり、以前は作品を詳細に確認する機会がなかったが、作品を目前にすると当時の時代背景や芸術動向を窺い知ることができ、本学の教育研究の成果として継続的に収集を行う意義を見出すことができた。

一方で、素材の剥落など劣化が顕著な作品や、梱包方法や梱包材が不適当な作品も見受けられた。買上作品の梱包は現状として当該学生に任せており、エアキャップで作品を直接梱包したものや、作品の一部が梱包材から露出したもの等々、様々であるが、工芸科や近年の彫刻専攻では作品用の箱を制作する学生が多く、保存に留意していることが窺える。保存の観点から考えれば、作品の形態や素材にあった梱包材を使用し、適切に梱包することが望ましく、改善の余地がある。しかし事実として、当該学生への選考通知から作品

納付までの期間は僅かであり、この時期は学事も重なるため、作品の梱包まで余裕がないのは想像に容易い。また、大学から梱包資材を提供する仕組みがなく、学生の実費となってしまうことも問題であろう。

思い返せば、旧キャンパスでは学芸員ではなく、専攻教員に多種多様な買上作品の管理を委ね、更には学生の制作スペースや教室の一部を利用した管理状況であった。にもかかわらず、多くの作品が一定のコンディションを維持できたのは、作品自体の精緻さだけでなく、教員、学生ともに保管に助力くださった結果と言えよう。

今後は一層に学内外での買上作品の普及に尽くすためにも、まずは一貫した作品管理のための基本的な整備に努め、作品がより多くの人の目に触れる機会の創出に取り組みたい。

平成の百工比照 展示・閲覧コーナー

平成の百工比照は、金沢市の協力のもと本学の事業として平成21年から進められ、文化継承、産業振興、文化発信を目的とし、現代に生きる工芸資料を収集している。収集資料は段階的な整備を経て、平成29年4月より旧キャンパスにて平成の百工比照展示・閲覧コーナーを開設、一般公開を開始した。これが新キャンパスの「平成の百工比照展示・閲覧コーナー」の前身にあたる。旧キャンパスから新キャンパスへの資料の移送は、所蔵作品と同じく令和5年4月中旬に実施した。この時点で収集点数は約6,200点にのぼり、資料を納める箱数で考えれば約600箱を新キャンパスへ移送している。

資料の配架棚は「染織」「金工」「漆工」「陶磁」で分割し、詳細な配架場所については、箱を各分野・産地ごとで作成するため、現在の収集内容や資料の形状、今後の収集予定を鑑みて構成した。資料の閲覧においては、天面が布張りの閲覧台を設けたことで毛氈を用いずとも閲覧ができ、更には台が円弧状であるため、とくに工程見本などは机の形状に沿って箱を広げられるので随分と閲覧しやすくなった。

また工芸技術記録4K映像も旧キャンパスより継続して放映している。これは過去年に4分野ともに制作した高度な工芸技術を高精細に記録したもので、学生の指導に実用的であることは勿論、石川県の工芸振興に資する資料でもある。あわせて、資料検索用モニターである「平成の百工比照コレクションデータベース」のモニターも継続して設置している。モニターで資料検索ができるので、資料へのアクセスが容易となり、閲覧の導入口として有用である。

今後は整備中の収集資料の新規公開を進め、コーナーの充実を図り、工芸活動の保存、継承、振興の発信を継続し、本学独自のコレクションの普及に努めたい。



平成の百工比照 展示・閲覧コーナー 移転風景

（頓宮 佑佳／美術工芸研究所 学芸員）

柳宗理記念デザイン研究所

新型コロナウイルス感染症の第5類移行をうけ、常設展示品への接触の制限は撤廃し、マスク着用等の感染拡大防止対策は任意により継続するものとした上で各事業を展開した。今後も状況に応じ適切な対策のもと、展示活動ならびに教育普及の機会の拡大に努めたい。

1. 調査

(1) 経常的調査

柳宗理の執筆、言及論文と発表歴に関する資料およびデータの整理を継続した。

2. 展示

(1) 常設展示（展示資料室1）

柳宗理がデザインした製品のうち現在も販売されているものを中心に約200点を常設展示している。実際の製品を展示・公開し、さらには各メーカーの製品が一堂に会している点において、来場者の好評を得ている。

(2) 展示リニューアル等

令和4年度末に展示資料室1のガラスケース内に「柳宗理デザインの産地」、展示資料室2のインフォメーションコーナー横に「日本各地に残る柳宗理デザイン」を新設したことに引き続き、令和5年度には、経年劣化した展示品の修繕を実施した。



展示資料室2「日本各地に残る柳宗理デザイン」

3. 教育普及

(1) 大学との連携

【デザイン科新入生ガイダンス】

本学デザイン科インダストリアル専攻と連携して同専攻の新入生を対象にガイダンスを行った。

・日程および参加人数：2023年4月27日

（インダストリアル専攻 学生23名、教員1名）

【展示資料室2の利用】

「センシティブユーザーと共創する器とカトラリー」

・会期：2023年6月17日～6月30日

・入場者数：430名

- ・概要：本学製品デザイン専攻4年生と工芸科陶磁コース3年生による「製品デザイン演習（四）」「工芸演習（三）陶磁」の合同授業成果発表展示

【レクチャールームの利用】

「環境デザイン3年リレー課題 プロダクトデザイン レクチャー」

・日時：2023年6月20日

- ・概要：本学環境デザイン専攻3年生が什器デザイン領域の演習初日に研究所の展示物を見学し、プロダクトデザインの基礎レクチャーを受講。レクチャー前後に展示室2で開催中の成果発表展示も見学。



新入生ガイダンス



本学学生による見学

(2) 団体見学（2023年4月～、本学学生以外）

- ・7月2日 燕三条デザイン研究会 13名
- ・10月31日 世界デザイン会議東京2023
エクスカーショントア 16名
- ・11月30日 岩手県立産業技術短期大学 22名

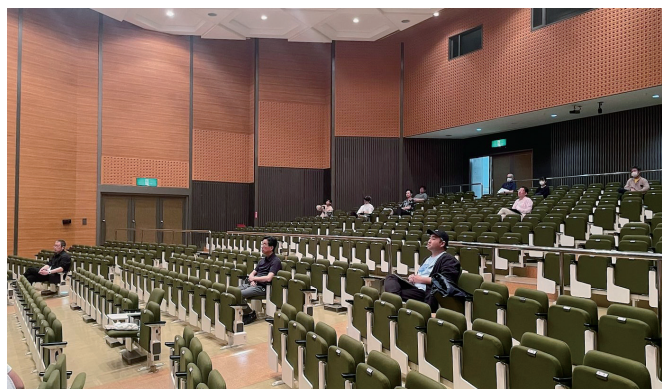
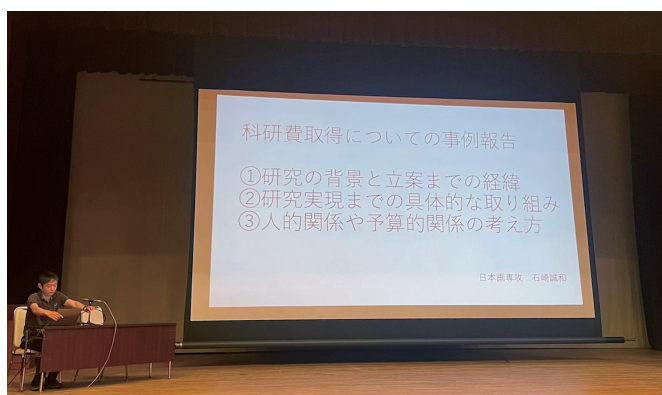
（在田 有里子／美術工芸研究所 学芸員）

令和5年度 科研費申請支援 活動報告

平成22年度より教育研究センターが主体となって行ってきた科研費申請支援活動を、今年度も引き続き実施した。内容は大きく次の二つである。一つは、科研費申請を考えている教員に向けての学内採択者による報告会であり、もう一つは、外部講師による申請書類の添削会である。なお、令和6（2024）年度科研費公募スケジュールがいずれの研究種目も前年度より一ヶ月程早まったことを受けて、本学における報告会および添削会ともに、例年より早期の開催となった。

報告会は令和5年6月8日（於：美大ホール）に開催した。教育研究センター長・荷方教授による本会の趣旨説明に続き、教員2名（彫刻専攻：芝山教授、日本画専攻：石崎准教授）が報告を行った。これまではその年度の新規採択者を報告者としてきたが、本年度はそれに関わらず、既に採択された研究に従事している教員に依頼した。研究計画立案に至る経緯、研究経費の作成、研究意義と社会への還元など、報告された内容はいずれも具体的であり、今後実技系教員が科研費採択を目指すにあたり、大変有意義な会となった。

添削会は令和5年8月2日（オンライン）に行われ、昨年度に続き、北陸先端科学技術大学院大学副学長・永井由佳里先生に講師を依頼した。今回も教員1名の参加に留まるなど、近年、添削会への参加教員が極めて減少している。申請者の減少は採択件数の減少と直結する。何が申請の妨げとなっているのか、より広い観点からの有効的な取り組みを、さらに考えていく必要がある。



（水野 さや／美術工芸研究所）

新収蔵資料紹介 | 橋本真之《真昼の星々》

1982～1994年

銅、鍛金（当て盤絞り）、H136×W160×D160cm

令和5年度、本学は現代の美術工芸における最も重要な美術家のひとり、橋本真之（本学名誉客員教授）の作品《真昼の星々》を収蔵することになった（写真1）。橋本氏は平成26～30年度、本学大学院専任教授として特に博士課程の論文指導でご尽力いただいた。講評等を通じて多くの学部生・大学院生が指導を仰いだ経験があることから、この度の受贈は本学の工芸教育そして大学院教育にとっても大きな意義があるといえるだろう。



写真1 | 《真昼の星々》（新潟県豊栄市内での展示／1993年）
※右側に見える小さなパーツは寄贈対象外である。撮影：橋本真之

【作家について】

橋本真之氏は1947年に埼玉県上尾市に生まれ、東京藝術大学美術学部工芸科に入学後、3年次に鍛金を専攻した。同大学大学院の退学後、生まれ育った地にアトリエを構え、以後現在に至るまで同地で制作を続けている。1990年の展覧会「作法の遊戯」（水戸芸術館）への出品を機に注目され、1995年に「第16回現代日本彫刻展」で宇部市野外彫刻美術館賞・埼玉県立近代美術館賞、1997年に「第17回現代日本彫刻展」で山口県立美術館賞を受賞し、2008年には東京国立近代美術館工芸館が代表作《果樹園—果実の中の木もれ陽、木もれ陽の中の果実》（1978-1988年、国立工芸館所蔵、写真2）を収蔵するにいたった。2016年に、批評・論考をま



写真2 | 橋本真之《果樹園—果実の中の木もれ陽、木もれ陽の中の果実》1978-1988年、国立工芸館所蔵、撮影：渋谷拓

とめた『造形的自己変革—素材・身体・造形思考』（美学出版）を上梓、翌年には、埼玉県立近代美術館所蔵の《果実の中の木もれ陽》（1985年～）での公開制作で平成28年度芸術選奨文部科学大臣賞を受賞している。

【当該作家の作品の概要】

キャリアのごく初期を除いて、橋本氏の作品はもっぱら銅を素材とし、鍛金で「絞る」ことによって制作されている。通常、絞り技法においては、鋼製の当金（アテガネ）の上に置かれた金属板を鋸で打って成形していき、当て盤（アテバン）で形を整える「ナラシ」が行われる。橋本氏が鋸で銅を打つ時、制作プロセスの大部分においてそれを受け止める側にあるのは当金ではなく当て盤の方であり、それ故作家はこれを「当て盤絞り」と呼ぶ。この当て盤絞りと熔接によって、造形の自由度が高まるとともに作品の大型化が可能になり、国立工芸館所蔵の《果樹園》や、山口県立萩美術館の寄託作品に見られるようなヒューマン・スケールを超える大きさの作品が世に送り出されてきた。

「当て盤絞り」という技法が含み持つ芸術的、あるいはこういってよければ「実存的」意義を自覚し、またそれを明晰に言語化している点からしても、橋本氏は比類のない美術家である。表裏両面から打ち絞られることによって、薄い金属板が半ば自律的にフォルムを展開していく運動を作家は「運動膜」と呼称する。そしてそれを、カーヴィングやモデリングなどのような彫刻的な原理とはまったく異なる原理に基づく新しい造形ジャンルとして提示する。運動膜という「可能態」が、銅と熔接という物質的手段を通じて「現実態」として姿を纏うのだが、作品は作家自身の体力と時間が許す限り大きく成長していく。橋本氏はこの成長を「増殖」と呼ぶ（作品数が増えることもあるが、銅板が継ぎ足されてされて大きくなるというニュアンスが強い。写真3）。「増殖」は生物学的なニュアンスを帯びた語彙であるが、この点と関わって重要であるのは、橋本氏が自らの制作／造形の営みを「貝が分泌物によって貝殻を自ら形成する」ことに擬えていることである。したがって作品の成否は、自らの内に成長原理を携えている生命との角逐のなかで測られるのだが、展示としては、樹木のような植生と隣接する屋外空間での作品の恒久設置が志向されることになる。美術作品にとって過酷な自然環境での展示を可能にしているのが、銅という素材の選択と鍛金という技法であることを忘れてはならない



写真3 | 《真昼の星々》（1992年時点） 写真に見られる部分は、現在の作品の内部構造となっている。撮影：橋本真之

だろう。理論の上では限界や完成という事態がない「増殖」という考え方、生命との角逐という理念、屋外設置を担保する高い耐候性、これらの諸条件が焦点を結んでいるのが、屋外で植生と隣接する場所での恒久設置への志向なのである。

【新収蔵作品について―作品と収蔵の経緯】

《真昼の星々》の制作年は、1982～1994年とされている。これは制作への着手から寄贈者（前所有者）の自宅庭への設置までのあいだ、継続して作品が「増殖」していたことを示している。寄贈者は1992年の展覧会で作品に目を留め、さらに大きく成長した作品を庭に設置したい、と申し出ている。作家の手元でさらに成長した作品は、やがて寄贈者の住まいに届けられた。寄贈者が自宅を手放す機会に、作品は橋本氏のアトリエで一時預かりとなったが、およそ25年の間、この作品は2本のシラカバの幹のあいだで静かに時間を刻んできたのである（写真4）。



写真4 | 《真昼の星々》（寄贈者の自宅庭での設置状態／1994年）
撮影：橋本真之

《真昼の星々》という作品名では、作品の表面に見られる直径2ミリ程度の小さな穴から差し込む光が星に見立てられている。橋本作品の表面には大小の穴が見られるが、大きな開口部は当て盤を持つ左腕を差し入れるために必要な作品構造の一部をなしており、その間隔や位置は橋本氏の身体との関係によって決定される。他方、比較的ランダムに開けられた小さな穴は、作品の内部空間に星々のような光をもたらす。これらの穴は「光」たることで、内部構造もまた重要な「見られる」べき対象、すなわち鑑賞者が認識し理解すべき対象であることを象徴的に示している。

今回の寄贈は、令和4年度の本学奨励研究「『橋本真之論集成』の刊行に係る調査・編集」の「果実」のひとつである。当該の研究は『橋本真之論集成―工芸批評の時代』（美学出版、2023年）の出版として結実したが、編集作業の過程で、

本作の存在と寄贈受け入れ先を探している事情を側聞した。美術大学として金工コースがあり教育研究に資する作品であること、国立工芸館の開館により代表作が金沢にあるという地理的文脈、そして橋本氏が教鞭を取ったという縁（えにし）、これらの理由を以って本学で受入れの可能性があることを打診したところ、寄贈者からの快諾が得られることとなった。

【作品設置場所の検討と今後の活用】

寄贈申請の意向を受けて、筆者は令和5年度に奨励研究「橋本真之作品の屋外設置に関する調査・研究」を申請した。令和5年11月7日（火）の「博物館展示論」は、橋本氏と藤井匡氏（美術評論家、東京造形大学教授）及び筆者による特別公開講義として実施された。同日正午ごろ、3トンのユニック車によって、作品が埼玉県上尾市の橋本氏のアトリエから本学キャンパスに到着した。公開講義は「作品・環境・展示―橋本真之作品の屋外設置を検討する―」と題して三者が発表を行い、その後、参加者とともに新キャンパス構内を歩き回って設置場所を検討した。橋本作品の特徴を踏まえ、主な設置条件を①本学構内の屋外、②植栽／植生の存在、③本学の教育研究に供しやすい場所、④新キャンパスの設備や環境との調和、とし、本学敷地内西側の桜並木、グラウンド端の池周辺、4号館南西側階段下付近の植え込み等を含めて検討したところ、アートプロムナード内の4号館南端付近の植え込みを最も設置に相応しい場所として選定し、設置場所の案として12月に教育研究審議会に報告した。

本作品は、理論と制作が高度に調和する事例（大学院教育の教材）、鍛金（絞り技法）の作例（工芸科の教材）、国立工芸館の代表作との比較対象、屋外のパブリックな空間に設置される作品の設置・保管・活用の事例（博物館学芸員課程の教材）等々の観点からの活用が期待される。橋本作品としては小振りながら、本学名誉客員教授にして本邦を代表する美術家の作品として、今後、美大を訪れる多くの市民や観光客にも鑑賞されることも期待したい。

末筆ながら、推薦者の立場から、本学を代表して御寄贈者に心よりの御礼を申し上げる。

【参考文献】

橋本真之『造形的自己変革―素材・身体・造形思考』美学出版、2016年。

渋谷拓「橋本真之作品の展示について―「方法の発露2019」に寄せて」『方法の発露2019―制作論の再検討』記録集所収、2020年3月。

渋谷拓・藤井匡 共編『橋本真之論集成―工芸批評の時代』美学出版、2023年。

（渋谷 拓／一般教育等・博物館学）

令和5年度収集美術資料一覧

■寄附資料	■制作年	■作者名等	■分類	■寸法・素材
真昼の星々	1982～1994年	橋本 真之	工芸	高136×幅160×奥行160cm 銅、鍛金技法（当て盤絞り）
水野家 古文書資料一式	江戸期～昭和期	水野源六家	工芸	－
坂下直大 漆工関連資料一式（96点）	昭和期～平成期	坂下 直大	工芸	漆、皮、竹、樺など 漆皮技法など

■学生買上作品

KANABIクリエイティブ賞2023 学長賞 19名（19件）

令和5年度修復実績

・実施なし

令和5年度所蔵作品活用実績

【貸与件数】

- ・学内利用（貸与・特別利用含） 21件（81点）
- ・学外利用（貸与） 2件（53点）
- ・学外特別利用件数（画像利用等） 8件（81点）
- ・学外卒業買上作品利用（貸与・特別利用含） 2件（23点）
- ・市内各所貸与（年度更新） 23か所（57点）

※令和6年2月末集計

※本学主催の企画展等への出品および本学寄託資料の活用を除く

【平成の百工比照 展示・閲覧コーナー】

- ・開室時間 月～金曜日：10時～17時
- ・休室日 土曜日、日曜日、祝祭日、夏季・春季休業期間、
年末年始、入学試験期間など
- ・入場料 無料
- ・開室日数 95日
- ・入場者数 1,796名

※令和6年3月1日集計

※キャンパス移転に伴い旧美術工芸研究所ギャラリーは令和4年12月23日にて閉室、令和5年10月1日より新キャンパスにてアートギャラリーおよび平成の百工比照展示・閲覧コーナーを開室した。

【アートギャラリー開室状況】

- ・開室時間 月～金曜日：10時～17時
- ・休室日 土曜日、日曜日、祝祭日、夏季・春季休業期間、
年末年始、入学試験期間、展示替え期間など
- ・入場料 無料
- ・開室日数 85日
- ・入場者数 3,769名

※令和6年3月1日集計

研究所運営会議	／原 智（美術工芸研究所長、工芸）、保井亜弓（美術工芸研究所（兼）芸術学）、水野さや（美術工芸研究所（兼）芸術学）、寺井剛敏（柳宗理記念デザイン研究所長、ホリスティックデザイン）、荷方邦夫（教育研究センター長、一般教育等）、渋谷拓（一般教育等）
教育研究センター	／荷方邦夫（教育研究センター長、一般教育等）、石崎誠和（日本画）、鈴木浩之（油画）、津田道子（彫刻）、水野さや（美術工芸研究所（兼）芸術学）、西本耕喜（ホリスティックデザイン）、入矢真一（インダストリアルデザイン）、青木千絵（工芸）
美術工芸研究所	／所長：原 智（（兼）工芸）、保井亜弓（（兼）芸術学）、水野さや（（兼）芸術学）
柳宗理記念デザイン研究所	／所長：寺井剛敏（ホリスティックデザイン）